

繰り返しを中心とした読書方法の学習成果

著者	田中 裕
雑誌名	神戸山手短期大学紀要
号	54
ページ	19-25
発行年	2011-12-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1084/00000792/

繰り返しを中心とした読書方法の学習成果

Learning Outcome of Iterating Reading Method

田 中 裕

キーワード：読書百遍、読書法、学習成果

要 約

近年、大学教育をより実質的なものにすることを目的として「質保証」が話題になることが多い。それに関連して個々の科目の学習成果を明確に、定量的に示すことが求められている。そのような試みを、山手短大生活学科の必修科目「見えない世界」で考察したのがこの報告である。授業見えない世界は、質問を作ることを軸として、何度も読むことにより、多面的に考える力と読む力をつけることを目標としている。目標が抽象的なだけに、学習の成果を定量的に示すのは工夫が必要である。今回は何度も読めば文章を理解できることに焦点を合わせて報告する。

1. 授業「見えない世界」とは

授業「見えない世界」は、授業名から推定されるような怪しげな内容（超常現象等）の講義ではない。学生と話していると物事の表面だけを見て判断することが多いと感じることが多かったので、「物事の裏や原因あるいは、いろいろな理由で見えない部分を多面的に考える」きっかけになる授業を目指して2002年より始めた授業である。2011年度の「見えない世界」の教育目標をまとめると次のようになる。

1. 何度も読めば文章を理解できることを知る。
2. 疑問、質問を作る力をつける。
3. 見えない世界を考えることができる。
4. 計画をたて実行することの良さを知る。

今回は、この中で「何度も読めば文章を理解できる」ことに焦点を合わせて報告する。さて「読書百遍義（ぎ）自（おのずか）ら見（あらわ）る」という言葉がある。これは「どんなに難しい書でも何度もくりかえして読めば、意味が自然に明らかになる」との意味である。著者は山手短大生活学科で文章を何度も読めば理解はどうなるかについて定量的に調べている^[1]。1年生のゼミでデカルトの「方法序説」を30回読み、理解の程度を1回ごとに記録した。それによると、読む回数が増えるほど理解力の平均値は増した。30回まで上がり続けている。多く

の場合最初の4、5回でもかなり向上が見られる。

このことを参考にして「見えない世界^{[2][3]}」の授業では毎回3500字程度の文章を3度以上読み、理解力がどうなるかを試みた。読み方のポイントは、「読書百遍」^[1]で明らかになったように、分からない小さな範囲を何度も読むのではなく、資料全体を一度に読み、それを繰り返すように指導した。2011年度は以下の13の話題を提供した。

- (1) 生活学科の教育目標と見えない世界で学ぶこと (2) 何故書物を読む必要があるか
(3) 「読書百遍義自ら見る」は正しいか (4) 質問、疑問の大切さ (5) 社会と個人を理解する
(6) 多元知能論 (7) 食品添加物 (8) 暗くて見えないもの (9) 電磁波(光)によって見え方が異なる (10) 隠れて見えないもの (11) 個人の遺伝子解析
(12) 小さくて見えないもの (13) 自然の全体像(累層性)

2. 何度も読むことのランク

授業の最後に、何度も読むことについて次のような質問をした。

「文章を何度も読むと理解できる」ということを知ることがこの講義の目標の一つでした。この授業では毎回文章を何度も読んでもらいました。文章を何度も読むことは理解する上で、大切だと思いますか。実際に文章を読んでどう思いましたか。率直な意見を150字以上でまとめて書いて下さい。

この回答をもとに分析する。ところで、定性的なことを定量的に評価するためには、どこかでランク付けのようなことが必要になる。そこで学生のコメントと、筆者の何度も読むことについての経験を参考に、何度も読めば理解できることのランクを次のように10段階に設定した。この報告はこのランク付けと学生のランク分けから成り立っている。

2. 1 ランク1 集中しては、一度も読めない

このランクは、文章は集中しては読めず、1回で眺め終わるレベルである。かなりの学生が読むとは字面を眺めていくだけと思っている。それなりに文章を読んできた教師からすると、読むとは理解しながら読むことだと思っている。しかし、学生にとっては「理解しながら読む」以外に「字面をおっていくだけ」の読みがあり、読書になれていない学生は「字面をおっていくだけ」のことが多い。

以下学生のコメントは「」で囲んでいる。「読んでも理解できないので、とばしとばし読む」「私は、昔から本を読むことが嫌いでした。なぜ嫌いだったかという文字を読むということをめんどくさくなって、ただ眺めているだけとかで、内容を理解して読んでいなかったために本が嫌いでした」「今までは理解しなくとも次に読みすすんで、読み終わった」「てきとうに流して文章を読む」等のコメントがある。このレベルの学生は読んでも理解できないので、集中

しては読めず、眺めているレベルである。

2. 2 ランク2 1回読むだけ

1回は集中して読めるが何度も読む価値を知らない学生も非常に多い。ただし、そのような学生でも小学校から今まで、何度も読んで理解した経験が一度でもあるかを思い出してもらおうと、授業1回目の調査では83.3%（96名中80名）の学生がそのような記憶を持っている。ただし知識にまではなっていない。

「何度読んでも変わらないと思っていた」「何度も読まなくていいように思っていた」「私は、文章を何度読んでも、分からないものは分からないと思っていたし、分からないから読むこと自体あきらめていました」「普段は文章を何度も読むとかしないから、何回読んでも一緒だろう。と言う考えでした」「見えない世界の授業をはじめに受けたときは、文章を何度も読んでも理解することはできないと思っていました」

2. 3 ランク3 知識として、何度も読めば理解できることを知っている

記憶を呼び起こすと何度も読めば分かった記憶はあるが、知識として何度も読めば理解できると知っている学生は少ない。学生のコメントで、授業の前に何度も読めば理解ができることを知っていることを明確に述べた学生は96名中僅2名である。ただしこの数はコメントにはつきりと知っていたと書いた人数である。本当はもうすこし多いかもしれないが、何年も授業をしていることから推定すると非常に少ないことは確かである。

2. 4 ランク4 どのように何度も読めばよいかを知っている

何度も読めばよいということを知っていることと、どのように何度も読めばよいかを知っていることとは別である。ここで教えた方法は「理解できなくとも最後まで（何章も）読み、それを繰り返す。解らない言葉の意味を調べるのは何度も読んだあとにすること」の2点である。これを知っていた学生はほとんどいない。

「わからない所があってもとりあえず読み進める。この学校に入学するまではやらなかった方法。でも1番理解できた方法だったかもしれません」

2. 5 ランク5 何度も読めば理解できることを実感（経験）している

この段階にいたることが「見えない世界」の目標である。毎回の授業で3500字程度の文章を3度以上読むことを繰り返すと、ほとんどの学生が何度も読めば理解できることを実感する。

「1回目と3回目では理解度が違っていたのがほとんどだったと思います」「実際に読んで

みて思ったことは、何度も読むと頭に入りやすいし、すぐに理解できたような気になります。本当に大切なことと実感できました」

この段階になると文章を読んで理解できるため、新しい知識が自分のものとなり、読むことが楽しくなる。

「1回目に読んだ時には気づけなかったことに気づくことができ、読むことが好きになれると思いました」「何回も読めば本当に理解できるんだと実感がでてきて、読むのが楽しくなってきました」「本当に1回読んだだけじゃ、分からなかったことも、何度もゆっくり読んでいけばこんな私でも理解できるんだなと思って自分の為になりました。意味が分かってきて楽しかったです」「一回だけでなく、何度も読むということで、文章の意味が理解できていき、理解できれば、より楽しいと実感できました」

このように読むのが楽しくなったと書いている学生が1割ほどいます。もちろん楽しくなるだけではありません。読むことにより、「理解力が上がった」「考える力がついた」「集中力がついた」「読む力がついた」「記憶力がつく」等のコメントも見られます。また読むことによって今まで興味が無かったことに関しても興味ができます。このような経験から読むことそのものに価値を見いだした学生もできます。

「私はこの講義で文章を読む事が改めて大切な事がわかりました」「文章を読む事はとても大切なのだという事を気づかされたと思います」「読むことはとても自分のためになるものだと思います」

さて、この段階になると理解しようとする強い気持ちの大切さも気づきます。

「わからなくとも、理解しようとする気持ちを持って読みなおすことが大切なことだと私は思った」「文章というものは、あきらめずに、しんげんに読めば理解することが出来るんだということが分かった」「文章というものはただに読み進めていくのではなく、自分で理解しながら読みすすめていくことが大切だと思いました」「文章を何度も読むと分かる」という課題は私にとって慣れないことでした。何か本などを真剣に何度も何度も読んだことがなく、最初は集中力との戦いでした。でもやっていく中で理解力や集中力を身につけることができ「文章を何度も読むと分かる」という言葉の意味が分かるようになりました」

2. 6 ランク6 何度も読めば理解が、しだいに深まることを経験している

何度も読むと単に理解できるだけでなく、理解がしだいに深まっていくことを感じる学生もでてくる。

「この授業は科学の実験と少し似ているなと思いました。文章全体を観察したり、文章のある部分を見てじっくり考えたり、そして疑問が浮かぶ」「読むことで自分の考えや意見もでてくるようになり自分の中で大きな進歩だと感じています」「一回読むだけと、何度も読むのでは文章を理解する量が違ってくる」「私は今まで、文章を読む事がとても苦手でした。なので一回読んだ物をもう一度文の意味を理解しながら読むという事などした事はありませんでしたが、見えない世界の授業を通じて、何度も繰り返し読むことで、一回読んだ時に理解出来なかった事も、二回じっくり読むと分かってくるし、文書を読むという事は私にとってたくさんの発見がありました」「1回目に読んで理解出来たことだけでなく、2回目、3回目と回数を重ねていくうちにもっともっと多くの事を理解出来てくる」「正直私は文章を一度読み終えたと、内容を全て理解した気になってしまいます。だけど、また同じ文章を読み返すと「こんなこと書いてあったのか」と気づかされることがあります。なので、一度読んだだけで理解した気にならないで何度も読んで理解することが大切だと思いました」

ここまで経験できると次のランクにスムーズに移行できるのではないかと期待する。

2. 7 ランク7 何度も読むことを授業以外でも試みる

この授業の目標の一つは、授業以外の場所で文章を読むとき、何度も読むことを試してもらうことである。ただし、授業ではこのことは述べなかった。自然に読むようになるのを待っていただけである。そのような学生も1割以上でできている。

「秘書検定のときとか、何回も読み直しをして、文を理解できたから合格できました」「前に読んだ本の理解ができなくて1回で読むことをやめてしまったけれど、ゆっくり時間をかけて読んでみようと思いました」

2. 8 ランク8 習慣として、理解できない文章は何度も読む

ランク7と似ているが、習慣化している点が違う点である。ただしこれの判定は難しい。しかし次のようなコメントを残している学生もいる。

「この授業を始めてから、自分から本を買って読むことが今まで無かったのですが、日常生活でも本を読む習慣ができました」

2. 9 ランク9 習慣として、理解できる場合もさらに何度も読み、より深い理解を目指す

これが最終目標である。多くの学生をこの段階までもっていくのは一つの授業では無理であるが、複数の授業で可能ではないかと考えている。

2. 10 ランク10 同じ文章（本）を70－80回読めば理解が質的に変わることを経験している

これを経験している人は少ないが、個人的な経験で言えばこのぐらいの回数で質が変わる。協力者を求めて検証したい。

3. 学習の成果

学習の成果を見るには、授業前と授業後の状態を比較するのが成果を現す方法である。したがって、授業前と授業後のランク付けができればよい。

ところで今回の調査で定量的評価をする場合一つの問題点がある、それは学生にランクの選択肢を示して選ばしたわけではなく、任意に文章で回答してもらったことからくる曖昧さである。文章での自由回答は、誘導的でないだけに、個々の学生の強調したいことは知れるが、全面的に知れるわけではない。たまたま書かなかただけということもある。したがってランク決定にはある程度の推定が入ってくる。全体としての傾向は分かるが、定量的な正確性は求めにくい。最初から選択肢を用意して選ぶ方法もあるが、選択肢を十分に用意するまでには、学生の自由回答をよく分析する必要がある、現時点ではそのような方法はとらなかった。

表1 何度も読むランクの人数変化

ランク	内 容	授業前	授業後
1	いい加減に1回読む	12	0
2	1回読む	81	0
3	知っている	2	0
4	方法を知っている	0	3
5	理解を実感している	0	57
6	深まることを実感している	0	22
7	授業以外でも読む	0	11
8	習慣として何度も読む	0	1
9	習慣として深い理解のため	0	0
10	70－80回で質的変換	0	0
	判定不可	1	2

3. 1 ランク1

授業前にランク1に相当する学生がどの程度いるかは、学生のコメントからは分かりにくい、まともに読まなかったことをはっきり書いている学生は12名であるが、これは下限であろう。実際はもうすこし多いであろう。では授業後、表1に示しているようにランク1が無くなったであろうか。これは実際は分からない、この分析の方針は1人に対してどれかのランクを与えるやり方である。判定不可（コメント無し）が1名と何度読んでも理解できと思わなかった学生が3名（方法は知っているので判定はランク4）いるので、最大限ランク1の可能性は4名である。

3. 2 ランク2

授業前の学生の読書方法はほとんどがこのランクである。何度も読めば理解できることを知らず、1回読んで、理解していても、いなくとも終わりである。授業後はこのランクの数は0になっているが、この数字は必ずしもうのみにはできない。これは何度も読めば理解できるということを実感した学生が多く、ほとんどが自動的にランク5以上になったからである。しかし習慣として多くの文章に対して2度以上読むようになったか否かは正確な数は分からない。したがって習慣としては実質まだ1回の学生も多いであろう。この不都合は、知識や経験と習慣を一例にランク付けしたために起こる矛盾である。本当は分けたランク表を作るべきだが、簡略化のために一つの系列とした。

3. 3 ランク3、4

授業前に「何度も読めば理解できる」ことを知っていると書いているのは僅か2名である。たいていの学生は何回読んでも同じと思っている。授業後は方法を教えればよいだけで、知識としては授業参加者全員が持っていると見てよい。

3. 4 ランク5、6

94.8%（96名中91名）の学生が何度も読むと理解できたことを実感している。これはほぼ本当の数に近いであろう。理解ができることをランク5、理解が深まっていくことを記述した学生をランク6とした。しかしランク5とランク6の区別が明確につくわけではない。ランク5、6がかなりの数に上がることが、この授業の成果である。

3. 5 ランク7、8、9、10

この授業の最終的な狙いは、授業以外の場でも、必要に応じて何度も読み、理解することになることである。まだその人数は12.5%（96名中12名）だが、他の授業との連携により少しずつ増していくのではないかと考えている。

参考文献

- [1] 田中 裕. 2006年. 「「読書百遍義自ら見る」は正しいか」神戸山手短大紀要, 49, 67
- [2] 田中 裕. 2007年. 「質問書方式による考える力をつける教育実践」神戸山手短大紀要, 50, 35
- [3] 田中 裕. 2010年. 「繰り返しを中心とした読書方法」神戸山手短大紀要, 53, 25